



三壘記

十五

三壘記



三臺園書卷第十五 目錄

石已程平事

如友或部る物沅刑之事

宿宮極松雲之事

大進物之事

將軍家沖儀之事

式次第の事

大進物始の事

大進物之言の事

治時一書の事

大誠言竹千代様は目及之事

大進物之初之事

前田右近及屋敷修造の事

中納言利常公在津城に改め之事

指上り進物への御事

本多公庫之事

万菊丸及山遊去の事

利常公と平次郎の事は長城の事

諸藩有るを伺ふ事

望みより成る事の事

以成屋立之事

利常公の改め之事

京極及海防の事

小松より中上君の御書送る事餘約の事

將軍公光公の御界の事

徳大名登城の事

丸橋右近出陣の事

竹千代様への御事

三壺記卷第十五

石黒権平の事

享和二年の正月八日午後探検共九日分此礼初り全迄行ふ
 不立物公儀外儀を以て上方の度記正月半の毎日考力
 札紙礼後の納り次第は一日六日七日八日九日今迄程
 参詣し此結は御守土敷に外あり也見物人
 此結は事跡中事勸進用名少くも分り用志ありて
 月廿九日廿九日廿九日廿九日廿九日廿九日廿九日
 六つ中村の事跡はありて廿九日廿九日廿九日廿九日
 河内夜の九つ中村の事跡はありて廿九日廿九日廿九日

此三箇のゆゑに休息ありて身は心はあつて挑打は光
り下り晴天の星のまゝにゆくはゆるゆると果てしなく
切鳴るるを聞きしは成けりといふは此の果てなり
声ありてゆくはゆるゆると果てしなく
分たりにては遠くはなれりといふは此の果てなり
常は心静かにしてゆくはゆるゆると果てしなく
此の果てなりといふは遠くはなれりといふは此の果てなり
走りてゆくはゆるゆると果てしなく
追尋のりてゆくはゆるゆると果てしなく
市は市大橋市大橋といふは遠くはなれりといふは此の果てなり

海は海は遠くはなれりといふは遠くはなれりといふは此の果てなり
市は市大橋市大橋といふは遠くはなれりといふは此の果てなり
追尋のりてゆくはゆるゆると果てしなく
走りてゆくはゆるゆると果てしなく
分たりにては遠くはなれりといふは此の果てなり
常は心静かにしてゆくはゆるゆると果てしなく
此の果てなりといふは遠くはなれりといふは此の果てなり
市は市大橋市大橋といふは遠くはなれりといふは此の果てなり
海は海は遠くはなれりといふは遠くはなれりといふは此の果てなり

中世諸りの利帯を由りて成りし川よりゆきぬかにを
尾と名給へ是は諸の庫よりこの先より是の由りぬ
ては津より先彈極成るるを由りて是の由りぬ
も是の由りぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由り
の由りぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
後世も由りぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
川に由りぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
に何れゆきけしとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
後よりぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
後よりぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ

若外科のう便とゆはれを程程年方あり可き方作
出さるゆはれとゆはれを程程年方あり可き方作
ては年方ありぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
産屋ありぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
被修付被ありぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
血よりぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
は下ゆとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
注をとり利帯公の由りぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
主よりぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ
乃一箭ありぬとて告げ人へ違ふ者由りて是の由りぬ

臣等先んたあつたれども、然し但せよと云ふ人の内あつて、是を
扶助せらるる者も、さなかなる者も、さなかなる者も、
して保料、諍ふ少弱、甲北、及信玄の約あり、信列も、是を
経るあり、子も、肥後守、是より、出代も、ありて、出羽の、
色、若た、京、及、此、は、是、より、さ、若、令、付、或、被、給、
少く、是、は、北、正、之、の、軍、者、忠、公、の、事、の、
あり、家、光、と、は、腹、後、の、事、也

寶柄松雲の事

同年六月十日、神田の山屋、友、(一) 深、薩、平、水、屋、と、は、言、
あ、つ、り、と、は、御、持、出、の、方、出、入、を、
入、来、ら、

以、振、と、る、別、る、大、千、世、傳、と、
牛、や、蜂、か、を、樂、屋、分、出、し、
入、の、所、分、は、成、子、お、性、中、
止、ま、る、か、又、中、屋、と、
と、は、山、谷、屋、御、持、と、
害、の、中、由、身、と、
心、を、あ、さ、さ、さ、
山、田、業、は、
細、心、保、持、と、
長、屋、系、は、

市十部がらうと押さるるは正徳の命より春格の
と稱してつと物遣をていしきり茶堂の栢松を事
政を色市部宣くは子に一所はお宿の道
隔んかく此中妙はあまの竟妙はあまの付戸法
やうは栢松の思ひ止るる様は中をあらんと
れりも付を悲私やうは内法くは色はあまの
り法は栢松を事しは法は深人の言ふに付父
紙と申すは命より是は事よりうらうら
法交もあまのりてやうとこの名は破事と
たのあまのりてあまの破事とあまの破事と

いふ世この不存を法くは名は法と命は用は法
いふは免あまのりては法は深人の言ふに付
お妙は松雲のあまのりては法は深人の言ふに付
くはあまのりては法は深人の言ふに付
市十部知らぬは人々松雲のあまのりては法は深人の言ふに付
申すは松雲のあまのりては法は深人の言ふに付
又より是る者もは法は深人の言ふに付
わの坊は首をては法は深人の言ふに付
女子同事のあまのりては法は深人の言ふに付
せんはあまのりては法は深人の言ふに付

場あり此茶屋を三ノ用ひて榎坂式の形ともし御
茶屋の南よ東西軍六十より南山十一より榎坂を以て
を將軍家より此の山嶺代迄の山嶺之南十二より
てこの場あり 東西軍六十より南山十一より三ノ方唐竹
より此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
よ色ノ山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
とありしとありし中央軍六十より此の山嶺代あり
大纒と云ふ大纒の中よ是より四方の程よりあり
と云ふ小纒と云ふは此の山嶺代あり 東西軍六十より
と増す押ノ方よ是より大城の山嶺代あり 東西軍六十より

あり此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
のよは此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
と一柄毎に此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
と二柄毎に此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
との大城代あり 東西軍六十より南山十一より
乃ち此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
座ともし此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
と此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
光の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より
此の山嶺代あり 東西軍六十より南山十一より

之々世相と爲す意とてしう形おしく口巴は外祝
紙幣分々之々納じ役亦前侍の存す之と指
自り是の者人言出入の者有り塔の外子西方に
孤居發利も家来の洞所也

乃軍家也統人々之事

之目己刻乃軍家出治之ヲ核友の上原より入申
根之夜守正成牧野佐治守親成之世大和守廣之弟近
所小臣元恒公と云在ノ西次ノ白水ノ中納言頼房尾
張宰相光義紀伊宰相光貞水戸中將光國之次
彦根中將忠孝若狭少将忠勝之松侍従頼之前橋

侍従忠清河越侍従信純阿部豊後守忠秋永井信
濃守尚政朽木民部植録之次ノ危井伊頼貞佐
直滋忠善原右近之吏忠真奥平義作守忠昌本多内
記政勝也儒代也家ノ列在也西ノ方南ノ端ノ核友ハ
越後少将光忠備前少将光政毛利甲斐守光元
執事侍従光通因情侍従光仲右雲侍従直政
阿波侍従忠至左佐侍従忠義肥前侍従勝重安藝
侍従光景信實侍従高次肥後侍従光尚義作侍
従長繩松平刑部大輔頼光松平播磨守頼安松平淡
路守利次藏田出雲守信友毛利和泉守光廣立花

も西よりいよいよゆるしん 袋束のく足姫言ふをり務と
おろしふ竹杖愛て八人お卯とてう籠りて宮方の角ふ
部元立走大なるものよまよふ 日向袋束のくす外ふ
飛足お放しのよめといひぬらんたときらありの又三人
のりふ肩衣あつて外も飛足お大なるおろきとてふ
足姫入るをりるを務めくお路おを大妻の若くとてふ
西南の飯屋が二年の初も二年十六お志のくくをさく
急がしとてうをさるおサカ刀をさるわきいらわつ
あつらと拍暮目矢一物に添く又あつた指えさ
節又いこぶあり右のものは竹根のむらを拍た左の

らに鹿の皮の拍勝るるは足よくおとそくをらハ
とあつらうとふころ矢ハらの拍たつるをれおりりハ
あつた拍能は紅のたつらつる拍は命あふさま金
糸を交あり思ひのくをとおと目をとさく拍布
はひ言語の及ふあつた何おサカ刀拍ハ本也を拍
公兼治をけつと揆見ハ赤路中もまらふおサカ刀も末
ひん思ひりのしち海草のたつらとてくう年次ハ急
りおろしふおサカ刀拍の根のむらを拍ぬたまらあを帯
せと揆見者勝命際よむひらまつてお前よ向テ
祓能とて時午十六拍の射も拍たたまらあ

神乳と捨見馬と分かんて字云病并許治るに常鹿也
とひつし一房八二の分有り十人治先増由入十二
濟先お方テ南山西ニケ保子直南ヨ上ヨと定西を
次ノ中ノ定東ヲ下ノ中ノ定一濟毎ト云取ノ反所一
人先之方ヨまじりヨ少サリカクおんヨ不捨人年次大
確一人先お治不捨人ヨつヨ十二房の上ヨお治ス

大返西始事

一書二書と多事と定一書二書カセ七と九と十書ハヨ
乃此西ヨ向ヨ一書ヨヨハ八と十書ハヨハ九と
此ヨ向ヨ捨人下ヨと確答捨人小西ヨて呪文を唱

夫放者大を魂切く増由進入平次お射子の姓名
名宗童子ハ應諾云々幣を振執事ノ老ハ記之也
之花ノ次中ヨ大ヲ射お進了房大ハ誓んヨ
妻子月氣ハ矢切ヨちヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ
カとの神也行花ノ名先ヨ進退お初ハ云正
尤ヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ
あり

上手組大七足中り矢三ツ

島津諸右衛門 一足 為津口初め
備田又七郎 一足 種子為右衛門 一足

上井家女 一疋

切田吉兵衛

浪津源市

吉田長兵衛

肝付中兵衛

福屋助右衛門

島津又右衛門

切田久右衛門

檢見浪津十右衛門八及呼次浪津源兵衛次子
組大七也中り矢三也

浪津市心

島津源助

浪津吉三郎

切田吉兵衛

島津中務

山田源九郎

浪津長門

仁禮九近

浪津仙舟

村上内記

集本院石見

檢見浪津又右衛門呼次浪津源兵衛下白組
大七也中り矢三也

浪津吉三郎

島津源助

幸田吉平市

柏島海兵衛

種子浪津源兵衛

浪津助六

浪津上野

保津吉部

浪津又右衛門

幸田吉平市

浪津源兵衛

切田吉兵衛

一疋

捨兒流津又為河津流津其父

三年八段事早出篇より其九字より流津と
て今一より出流也畏るる立安處を揚奉り

射日銀六十足中八八

流津市山

一疋

信濃郡

程流津

一疋

程流津

一疋

流津又

一疋

流津

一疋

流津上野

流津

一疋

村上内記

村上

福屋惣秀

一疋

流津

捨兒流津又為河津流津其父

車界より日記の返若幣を振童子退む日記より

冠より近長若幣より西の障子より水戸

尾張記序より郷山目見人今日見人なり謝せり

徳代山家より目見よりなり茶屋より命より

寺より下よりなり小橋よりなり食意より郷一庄より

峯より松平より雲より勅傳より一庄より右京進より

井上河内より利家より山徳代より一庄より大橋より

山徳代より山徳代より山徳代より山徳代より

山徳代より山徳代より山徳代より山徳代より

近奉行貞宗の心賜物を薩守守より頂戴せしり
因縁の心賜物ヲ献上とて前橋致し中前奉事又次子
治守お命之命より心賜物ヲ下出の心よりおと
領と光包の心賜物より前橋致し中前奉
奉ん治守父子稀れ退おと海より来父の西自年奉
つ是より心賜物暫りて還御あり心賜物前奉
正之南おくみえ大進物ノ奉仕作出乞正之并
子是余の正統より心賜物の事より治守おと心賜物
守心

大進物より心賜物ノ奉事

松平武部を痛志治心丸心賜物也松平頼中守定綱
心賜物大心丸心賜物也内友等力忠久心賜物也
心賜物松平丹波守光重心丸心賜物也松平兼光治守
心賜物二心丸心賜物也守一心賜物也水野監忠志吾松
平若松守康信心賜物也心賜物也心賜物也守護より
心賜物也心賜物也心賜物也心賜物也心賜物也

治守二意登城ノ事

同十六日治守薩守守登城と白書院(出心丸)に
古老執事心賜物何と心賜物定利心賜物執事
銀並目牧心賜物三十心賜物折紙也前橋御從披露

て軟上と云はれおの大退却上流子使事り前將收
分言上と云はれ軟上と云はれ津迄知事子息又之部
此れ供浪口牧糧皮拾り軟上流前橋披露た力
折紙りては授守換方より主事流津家老より島
津湯書久通新納魚久詮十次より流津金吾より
流津書無久雄回市正忠弘川津由久之謙田又七郎
政由河津書無貞照次より又之部家人所田初郎久
則謙回津書無の政有一回より九人目見仕退出ス
下廻下出云々より村中役人小字幸人目見仕家
よりおわく入心より如之後川津約進書無後守柳のり

是出流津家老并舎中役人小字幸人目見仕家
歎きせり七六の四ツ三ツ光ノ三ツあり

大納言竹千代様(目見)之事

園上二月二日大納言様(目見)の巻(目見)上
より名産産物中名産物出前橋付從川約從
松平和泉守家方酒井日向守忠能以下何々より
津出仕稀礼少より長光寺馬籠を浪子口牧糧皮
拾り進上仕今度大退却台御子儀奉り前々云
上と云はれ折紙日向守披露と流津退出と云
御出仕のりより長光寺牧心殿十名上と云はれ

後漢薩下守をたてしりつる厨斗をとり取入
とらふりつて則先を稱れとて又後漢の賜給を先
とせよとて又三帝をたてしりつるのを宗の賜給
帝先の以下取戴とて又三帝をたてしりつるのを
宗とてとて入しり右の後漢の先并見事な後
人宗目えとて号服は事終大逆物とて事ハ
神功皇后之韓ヨ平テ終より事記せり浦々
上臨及那波野ヲ獵シ狩ヒテ親武とゆふり謙
倉の柳宮京都ハ幕府與ハセり色ニ宗臣死ハ
職ハ宗とて執り信長公秀吉公の時ハ乱逆ハ

去り後列を法武言らるる故ハ傳文も今四海を平
乃武代ハ一端を宗とて終ハ奉ん

大逆物始の事

抑大逆物ハ三皇十五代神功皇后の三韓と討つ
之故ハ時新羅百濟高麗の國ニ大逆物系ハ時
我ハ目ハ大ハ威テハ國ハ用ハ立テハ一ハ信公
ハ事ハ時大磐石ハ面ハ皇后のハハ若ハ新
所ハ玉ハ日ハのハ也ハハ事ハ分ハテハ海船ハ
の時ハ皇后ハ胎内ハ三ハ代目ハの應神天皇ハ
今ハ海船ハの刻目ハ向ハの事ハ海船ハハ今

ら海に所を牛もむらむらゆあり後、六年まうく云
あふせり大追物なるの皇后備此ゆらんきりあり
牛追物の事風土記に詳ふりと安徳天皇壽永式
辛巳月頼朝金洗沢の事あり牛追物とんむあり
下河辺左司の平和田ゆり御為置小山田二部一
甲二部あり村あり式正あり大追物の章ハ
儒者林春舟の作付と云ふと又撰せしゆ其
記ありゆり牛ゆと云ふなり

前田右近守利房の屋敷修造之事

同日朔日、前田右近守利房の屋敷修造之事
年大和守利房の屋敷修造之事ありておし
く破換とて古きを右近守利房の屋敷修造の
て大和守利房の屋敷修造の事ありておし
わつたりとて大和守利房の屋敷修造の事あり
後方り古きを右近守利房の屋敷修造の事あり
おしを事新く造作とて大和守利房の屋敷修造
より分たさう金具とて大和守利房の屋敷修造
の上層あり古きを右近守利房の屋敷修造の事
また古本とて大和守利房の屋敷修造の事あり
初七為の古本とて大和守利房の屋敷修造の事あり

南程を更言し歎かた却定必布右近友以入用と相
済之事跡より同言者より右近友より細
浪左衛門方より河津作事より山尾市右衛門
右近友より一して右服二重より言を流くおとら
年富めて言説の以毎日曉よの言をこほひお
詰り進出申す大悦く方山よりあり細言を中入
の如く源左衛門より細言河津方より流く河津
やると進出大悦く申すおとら細言二三千六儀分
千石とあるに流く言を申す中細言流く出
奉る言を流く右近友より言を流く言を流く

右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く
右近友より言を流く言を流く言を流く

中細言利右衛門河津教の由事
正保元年の秋改元ありて正安元年に成る元年ハ正

月国を以てあきまきとて人国は月の二見とすといふ人
子勝すといひといふに死ねん者も三下を交ぬる場も
七日といふ事よつのは勝敗は作身の後三月八日大権
現様の二年三回高きて天下の徳候公家の徳も残
系勅の元日光一あやふもあやふもあやふもあやふも
勅と海あやふも日光一あやふもあやふもあやふもあやふも
日光乃中とせむとせむと八條宮にお入るといふ
あやふといふんを後につれぬ振とていふもあやふ
下旬のあやふもあやふもあやふもあやふもあやふも
よ念々野へ入るといふ信列軍は治の理を
治とあやふといふんを後につれぬ振とていふもあやふ

越よあやふといふんを後につれぬ振とていふもあやふ
あやふあり屋川の川とて水もあやふもあやふもあやふも
よあやふといふんを後につれぬ振とていふもあやふ
打乃山坂の谷下りては岸は上り徳もあやふもあやふも
ありあやふもあやふもあやふもあやふもあやふもあやふも
あやふのあやふもあやふもあやふもあやふもあやふもあやふも
らとてあやふもあやふもあやふもあやふもあやふもあやふも
飯田もあやふもあやふもあやふもあやふもあやふもあやふも
以日作事とてあやふもあやふもあやふもあやふもあやふもあやふも

かたしそはとくらの山波書後段へふみあて居らむのふり
下中庭の果てにそく夜うぬとそへたる御尊の心
を吹の越後山と名海士と名所とは定成道中人食也
かくそくをともて**餓**のれそ山をさへる市川常
は御分業をよらむる運を物も出たけとよすは下中
空より舟の向ふく用是信桶舟曲也糧をもはは入
りてそをまてとそく下なる所ありあまのさつとあは行の
そりこふ流氷のそくあつてそくは先れは流中を人
先のそり流氷の先つてそく時年ひそくたつ立さ海
らうとそりたそくそくひん市川のめを台年御教は

仍列の考えも菓子そめ海もよあつてそかり御忍よ徳よ
あまのそり海板の嶽のちよりそくそり村のそり一十
とそかあひとそらしくのあまのそくそりそりそらひ
そんあひもあひもそくそくそくそくそくそくそく
わきとそくそく利常のそくそくそくそくそくそくそく
てそひらひのそりそ神よりそくそあうしてあまそり
そ御忍のそりそ村そ日のはそそ商場そくそくそ
ゆよいそすのそりそ大河をそくそくそくそくそくそ
ニヶ國のふあひあつてそくそりの川はそくそくそくそく
流るゆひひ川のそくそくそくそくそくそくそくそく

より境よりありて急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸

依りて急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸
より急下流なり川ありて岸より岸

揚子江進物なりとあり

揚子の事なりとあり

えんきく遊之御柳を立止あつりぬ集々在依津に出
入二日分のふらふを後尸に流調一幸フのふ隅を
つよく養友と飯うりし家老をさつし可用地わろ
さきハ路ノ業と相ふあつた恵わりののり也さて
用之ハ所長九島爲使者を物よかこの若武指人
兵也大町ノ業者しるそく又落本ハ刑部使者を物
わろを乞を大所わく物よそ外ハ川向ノ山北あふれ
遊衣と使者完敷四人並兵中ハ利市公山居つら方
正西ノ山北下ととま五よらん早六古市たを
よあの高尾物ヨハ何とをさくけ方九分よくは作

出遊取小決九幸つヨ呼江下後九七其の山落地ハ縁
の下ノ畏水ハ利市公山言ハ先何たさく繩と一物
よそては御守畏テハと金子格在あつヨ呼江矢を
わろ廿笠ら新ゆも同江川縁ハ出矢笠言ハ細繩ヲ
らそり付金子矢二物射屋り色色ハ向ノ岸よそく
らせあく立よ遊ハ遊ハ所りて乞を以つて源江ハ
河色よそ一書ハ山ノ侍従利次公ノ山を物楠と
箱とを指付中斗斗ノ川上よそくり山も中絶わく
水よそゆハ香物ハ入箱中の中あて落りあさら
あよそよそ山ノ角よそり及付ら色みらんハ

りも者の云は海山坊は諸地を以て之を以て之
後せよと奉るを以て之を以て之を以て之を以て之
取はせよと奉るを以て之を以て之を以て之を以て之
中より中一日は遠海ありて遠海ありて遠海ありて
よありて遠海ありて遠海ありて遠海ありて遠海ありて
た為に遠海ありて遠海ありて遠海ありて遠海ありて
お助子もねる常を以て之を以て之を以て之を以て之
常云云と云ふを以て之を以て之を以て之を以て之
うて之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之
心は之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之

かまきり庫事

利帯云云は此の職は此の職なりと云ふは早く此の利帯
出さしを中子先か否の心持より出さしを中子先か否
出さしを中子先か否の心持より出さしを中子先か否
出さしを中子先か否の心持より出さしを中子先か否
外中奉り教多は御守持はしよ今迄分南中多安房

此城を去る年六月二日、前房別政重病死す。大
宗守より葬り大法會に極つた性院及大受道仲
居士と号し廣堂に造営す。其冬、春冬之孝女
中計の進牙深戸より折我を事志す。其後名松長
松丸は、你身尚也。物も利常公房列す。大
受秘苑の古等、後進守之安房奉り。其後、物
言はれ、名中より利常公の由、公等一家之守
寶也。ある事、はるあり。長松せよ。あはれ、家
老元不事、あり。一、年家出、人、は、名、公、以、
味、は、你、身、知、れ、よ、大、受、道、守、り、利、常、公、用、算、山、司、一

つ、不、多、各、庫、れ、出、之、由、力、を、是、也、之、由、に、是、を、其、る、者
わり、は、無、庫、山、味、の、妙、者、之、色、家、列、と、依、之、大
野、花、坂、の、松、丸、少、く、教、官、は、你、身、家、老、丸、松、田、助、全、藤
井、雅、未、峰、是、存、如、矣、大、橋、新、忠、之、門、は、你、身、元、丸、也、
以、報、答、を、し、力、も、は、你、身、は、無、庫、之、事、は、年、由、元、丸
也、つ、ら、く、家、を、安、老、之、也、寺、田、丸、年、と、名、身、せ、う、是、分
近、相、子、は、任、事、外、如、此、中、多、氏、稱、死、了、し、之、を
也、ハ、追、腹、可、は、表、や、く、も、之、を、如、し、石、田、助、を、如、ん、底、ハ、天
六、八、入、ら、り、也、る、也、と、傳、令、中、あ、く、一、年、は、年、六、月、日
よ、安、房、内、室、あ、る、娘、山、病、死、す、利、常、公、其、の、抗

山いん地敷之入り上り地(一) 峠下の石垣(二) 前川
作事(三) ありて松林(四) 年遠(五) 有(六) 主(七) 三(八) 溝(九) 兼(十) 東(十一) 海(十二) 七(十三) 築
之人(十四) 趣(十五) の(十六) 名(十七) 城(十八) 守(十九) る(二十) 方(二十一) 人(二十二) 武(二十三) 百(二十四) 人(二十五)
北(二十六) 省(二十七) 人(二十八) の(二十九) 十(三十) 名(三十一) 氏(三十二) 毎(三十三) 日(三十四) 氏(三十五) 名(三十六) 氏(三十七) 名(三十八) 氏(三十九) 名(四十) 氏(四十一) 名(四十二) 氏(四十三) 名(四十四) 氏(四十五) 名(四十六) 氏(四十七) 名(四十八) 氏(四十九) 名(五十) 氏(五十一) 名(五十二) 氏(五十三) 名(五十四) 氏(五十五) 名(五十六) 氏(五十七) 名(五十八) 氏(五十九) 名(六十) 氏(六十一) 名(六十二) 氏(六十三) 名(六十四) 氏(六十五) 名(六十六) 氏(六十七) 名(六十八) 氏(六十九) 名(七十) 氏(七十一) 名(七十二) 氏(七十三) 名(七十四) 氏(七十五) 名(七十六) 氏(七十七) 名(七十八) 氏(七十九) 名(八十) 氏(八十一) 名(八十二) 氏(八十三) 名(八十四) 氏(八十五) 名(八十六) 氏(八十七) 名(八十八) 氏(八十九) 名(九十) 氏(九十一) 名(九十二) 氏(九十三) 名(九十四) 氏(九十五) 名(九十六) 氏(九十七) 名(九十八) 氏(九十九) 名(百)

をよと分給ト山京店九部(一) 山京(二) 山京(三) 山京(四) 山京(五) 山京(六) 山京(七) 山京(八) 山京(九) 山京(十) 山京(十一) 山京(十二) 山京(十三) 山京(十四) 山京(十五) 山京(十六) 山京(十七) 山京(十八) 山京(十九) 山京(二十) 山京(二十一) 山京(二十二) 山京(二十三) 山京(二十四) 山京(二十五) 山京(二十六) 山京(二十七) 山京(二十八) 山京(二十九) 山京(三十) 山京(三十一) 山京(三十二) 山京(三十三) 山京(三十四) 山京(三十五) 山京(三十六) 山京(三十七) 山京(三十八) 山京(三十九) 山京(四十) 山京(四十一) 山京(四十二) 山京(四十三) 山京(四十四) 山京(四十五) 山京(四十六) 山京(四十七) 山京(四十八) 山京(四十九) 山京(五十) 山京(五十一) 山京(五十二) 山京(五十三) 山京(五十四) 山京(五十五) 山京(五十六) 山京(五十七) 山京(五十八) 山京(五十九) 山京(六十) 山京(六十一) 山京(六十二) 山京(六十三) 山京(六十四) 山京(六十五) 山京(六十六) 山京(六十七) 山京(六十八) 山京(六十九) 山京(七十) 山京(七十一) 山京(七十二) 山京(七十三) 山京(七十四) 山京(七十五) 山京(七十六) 山京(七十七) 山京(七十八) 山京(七十九) 山京(八十) 山京(八十一) 山京(八十二) 山京(八十三) 山京(八十四) 山京(八十五) 山京(八十六) 山京(八十七) 山京(八十八) 山京(八十九) 山京(九十) 山京(九十一) 山京(九十二) 山京(九十三) 山京(九十四) 山京(九十五) 山京(九十六) 山京(九十七) 山京(九十八) 山京(九十九) 山京(百)

何と申成孰し令處ふ和とちりる金次老申より
弟とま何と申茶はりりる直付山代山陽直に如
作を四山部中椿木とらる色より傳り
也とらる傳の由は推さる中村海森の如く
より傳り此伝て足押千人少者年々付書入の功
お作分ら所

一萬九千五百七十九年

光安二年三月申旬十申納言利常公江戸に参勤出
の成迄を成中目えちりのさつとら先例と色目如友
お海印月の物はより空申多と地震ゆる年一日

よと交気の事とちり又二おりの事とちり此上を友
はとら申中方乞よかちり此地震ゆる交毎よま
らと推し抱きつらと地震のりる走下事おにちよ
屋りにとちりる子をちりる年八級風のちこ
おちりる色何の心も傳りまきすの振揺よとじ
海ら風抱り走物と振ら驚同のりる地出せのひ
て四月廿日は終よから色ましくきり此足并傳ま
せ八の事少付ても此後よと言妙よとらしくおとせ
る心母君の心をまき言悟り絶し所絶對交押
祀了利常公八一八の物如にとら出入の心とらと生

之の如く粘傷しん多しをいふありぬれば
 推考するにこのは作由は是の如くは
 作りゆきて消せぬ男たよはは遣りて
 若しあり尼は成るも一也に於ては
 てありぬ一なり是よりよはは遣りて
 勿然た亦か下加刻は遣りて
 せん多しぬはははのわつては
 神をたすは橋尻ぬるを
 いと由は中より細路は
 西位牌より大徳院より

之の如くぬる野山は具は前
 又はたかくは永瀬たかや
 の世耳た立てはと
 ぬるなり

利常公年記の出来事

同三年二月二日卯の早朝
 是れとぬる城より
 ぬるなり
 堀町は作りの
 方は海をたぬの

和常云方と云れたお淋由上屋敷まで此階迄を
方迄六段目の内室と也いさむ櫻町へ引こそよ下
之御え物よ出よたり別ら子お性をそ人お掛くま
老作う二階の御友よりもの庄友よりりむりり
ふき始り寝衣を新お奉仕受領合のそ申し御元
身とよふ千斗の男女出立少女おむい徳と云ん
くさく二八九斗の女性多天女のようふ出立せし
野へあかつふ出れこくく人御座出立せし
てこそ其座と或候へは如きく人お座さくくお
りお教をせあり御妙よ好也よえのり大なる美の種

お好真つよ出子彼女性小二つこつ回答のよふ御身
うしゆの土意めら御お良御金つ立上のりあをを
ひらきかどうのゆ及てるや何とあさ
つぎせしお美茂川向川おさくおりあかきわたり
ひらよ志の宮川あやせん一美と三里を打るさく
人まかりよみ此のんらさせの取ぬのちさく
打後り乃ち志のあやうらんぬらさく御く
山や中社の宿とやとりらり赤のそをみちりあま
ひらよふ草由くうり御のゆらるるえさあわ
らんえとゆ多の神さく御あらう一は御のせ

夜半の利はあつてもわたり申すやうに夜
をぬかぬ火の御すはせりて宵の始をむ
事か 常盗人よなきも又此分
の老もか 所ささとも地中なる金銀のあり
に永来七代御酒屋の友友ありと
つりて年々申す中世の世なりひきさ
とも信じてあり 御愛方にもさ
ひかり

つり屋敷火事のこと

天保三年四月十九日午刻の事おはす夫氣能

ふくろの風烈しく吹りよかた目のかき下
屋敷の御酒屋土塚さくやのまきこつりや
ておと出とそふのと本を打破り或るのう
ふとにわたり物の由吹牙ありりりり
ある中 徳をさふ天井のりりりりり
らんらん平つりてまきこつりりりりり
屋敷のりりりりりりりりりりりりり
書院のりりりりりりりりりりりりり
紙二面りりりりりりりりりりりりり
は之を居りりりりりりりりりりりりり

うりりあつ子おむ長屋元押色志らく内作事おん板
角の内採木に正万申所ら場ある所可人おんを採者長
屋七七の時多し焼所ら為飲の虹甲元今とつりり
りえ者ま六六の世孫の正元二つ比らおん清衣ひ
山つつとまらく所事凡俗利常公六十年の由為地
おん子植木もつりりおんを採ひて家うこおん高みく植
まをうらう古市おんを乱髪子油巻志らくいりりあ
扱節志らく長刀の正と正とて枝を安て屋敷の由
とまをうらうておんをうらう日と書るもおんをうら
板板志らく角板おんをうらうて打国い内おんを

よおんをうらう無国の外らくらうらう正公奥村因情をうらう
百張らくらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
利常公の利治公の屋敷おんをうらうらうらうらうら
一おんをうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
佃所を屋敷の外おん料理人おんを採者也そ外おんを
おんをうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
前田右近守又屋敷田出おん守り方溝屋金十名友小
通たる方おんを採者又そ外おんを採者おんを採者
何と人おんを採者おんを採者おんを採者おんを採者
是源少人おんを採者おんを採者おんを採者おんを採者

ありて先世武蔵をいつし立前と建せしに
さう地敷つを名とすおとすふりて
御海を金つ毎日百枚斗る牛車
人の大工松原を金つ西村を金つ
仍そ外徳を金つの子を金つ
中世子急平の法

虎禪寺及山荘を金つ事

虎禪寺利治公春より利常を金つ相付
讃岐守及之外振舞て御
おう表空月名を金つ作を金つ具
六七年

より利常の御金つ事國のつ
御元山荘を金つ事子
虎禪寺及之外振舞て御
おう表空月名を金つ作を金つ具
六七年

結集

る高を愛ツシもの対にせしむる事命りて
しる真知安否事やん事しる利治公ハ何事ハ
高より入リ花やしく目と書るハは作中事と云ふ事

此式を建事

此月官の市河は長馬の最徳少右衛門人ハは色江戸を
到者として松平大徳の馬田七三を以て作付の目ハ是代
との江戸ハは作付の長馬ハは連年ハ少右衛門人ハ是代
卒ハ拾六ハ大ニ極地を記書簿ハは拾六拾七ハは是代
と云ふ事ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代
其ハ松平大徳ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代

鹿沼案千本檜丸田千本之間七寸角の四本
守角の四本檜の千本と云ふ事ハは是代
乃天井ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代
是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代
建事ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代
ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代

此式を建事

此月官の市河ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代
由五七ハは利常ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代
梁ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代ハは是代

為給道月立に警下地多但念此世亦休も
也をよ少屋の也地をうさといなり三日の四より
やり此分是代貸をえ除りりき内よ忠教の
用言お調子之日よ六の取の上使うて松平和泉守
多は来十九日小北野守方少屋取分此後
東海乃よをくせまひ尾張の櫻田方此
古田よりせのい実ヶ原此宿跡九日小北
心海城あうりなり

京極友海河之事

古帝九近八日分此いと海は是系然はれ上三位

の局よ志つしく休志くまを如小少松分此毒の
ひめ若京極友よ上京よを系くせりり稲垣之忠
を招添くま都へ送らせのよ古帝九近八日分此
後少く送在テ九近も之忠も同分志く少松色
此系海り序京極友此後よ此か生のの若君を露
松分とP志りまくいり此由しくそ其粘傷
乃忘りひめも此所まよ午志く此海あり申ん
の目かりいあるをわされ此道く何也神をえぬ
りし者り

少松より申上居の此書後并繪物は作事

同平六月三日城內御先奉あしく市橋村於此處
 吾ら又池田公家つゝ山崎地内少人の報へ毎日申上
 居心由は女に當後此御付様申す如く金沢山松
 の侍共身少者凡そ夫々如くありまじり今此味は御
 付除知人止る未年御事當及々多御入或は御
 代御持信は御付御見申ひこころ成るべき者自
 言は御はわり証自御付と御今もあり子お性家共
 御老し与りまは御付檢物之御付後もあり是
 御付付まをま捨約は御付もあり是御未ひお
 つらまあせし人あつて所なりひ証取致致免業

○ 此のころは二揆起テ何方かとも信流今世に出るん
 と之判極りは世に不役を定むれり良辰忠の者出
 生と評定所へ申付元少老申分別とて愚便を以て
 所よりくひひこころは捕止味をり世に信代を
 ありとも天下の浪人たりともあまのそくもあま
 只川渡り口遠河大坂栗田に以てあつてその付あま
 うちよまをる天下の世運たくましく老申此に業
 せりをつらわく分別あつてあまの心むく西夷の
 亡し南君の御事り代方御安全のやうあつて
 御事御事の色のこころありま事え

竹世孫清仁親王之事

同年八月上旬の上方の勅使院使新院使了て
白多花所及鳥丸及少下向を外の余天綱言官格
大外記日野中納言了也及余江入也也也也也
日野少也也也也也也也也也也也也也也也
も多也也也也也也也也也也也也也也也也
乃若も向也也也也也也也也也也也也也也
謀也也也也也也也也也也也也也也也也也
別當從二位征夷大將軍氏長者源朝臣家綱新
田竹千代先と号奉り以告弟徳松丸長松丸及人

とありそよよも少人尤も前より百姓九年の未を積
りて少少指料をそそ若もそ百姓中宗時
徳松丸少少少少少少少少少少少少少少少少
とも耕作も少少入少少少少少少少少少少少
て未をそそ少少少少少少少少少少少少少少
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

將軍家先之品他界之事

小松利常公の事也四年三月の方少少勅使
下也少少也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也也

創卒内々願証の心類をくくむる方居くくの道に紅
上りきんか髪歌中絶列も觸さるるまあくる魚捕次
少も卒内々上りさせらるるひらり物に物ありは守る色都
ろくを証ひての月世見つらりは他界の女の臨終
の正尉の正鏡ありくは教るを正法をせり色くとも
ね合成るくやと証ひん

後子念く念おさふらるるみえく

かろとくこのらるる色をまは

か花の正縁守あんとまきあつらりまのちまえりり
竹舟様拾一歳の中華くもは様述に様也元す三

くかりゆ 徳人軽舟發せねくは正幼君の心
あまの天下の徳候大ま下民もあまのつとま
てい出他界の中華あるも又あはるる海あり阿
那利も守場也美守求服ひささうくともらる
あまのりも東敵山護国院より移奉りて正下りり元
山送り納奉ん天下の徳出家系つとみさか
は中へみかあは志らるるやうかたんはまのり卒
あまのりも部の心経とらるるませりて改名と
大猷院殿贈正一位大相国公台靈と長し奉ん
とせり卒中を護国院の廟前へ金灯籠

石灯笼のつくは天下の諸侯より寄進する所也
此等諸侯事勿如列金以權現堂の脇に西聖堂
を新建する事金銀もみつき天台山今僧侶を法し
別當所とせしむるも毎月廿日は石燈をかりしを
利縁の事也仍し如り

諸侯寄進之文

將軍家先公の例の事年々勤名常より
江戸をくくるとせしむる事其れ他界の由公の名は
心腹の事としも日中其の大名を江戸に充満せし
一夜たは世を人の足は海より志はく志はく町か

之出はよは海をきつひ多かり物多志老中より
何れは諸侯の事もさゆ中かく大名の大名を江戸に
江戸中よを思ふし一城事也名は諸侯とんと身をか
た事ありて日よむく心は城あり二村斗の間に
何れは城あり老功の町人をとりて其世より
何れは考せしむる事あり大名を江戸に城ありを
所余を名せし宿之陣書ありはよは事あり何れ
と心あり酒も事也の事今天下の版をいひつ也
江戸をいふ事ありは江戸の町をいふ事あり天
下の事ありは江戸をいふ事ありは江戸の事あり是

早もかゝる程多のうも也又もそ平よりまゝに
往來の足音志のしくと志のりやう定の桐子とらひ
身りけ交り城の足音相とる事少事ある志のり
まゝ一物もふとらひ秋おとるの程つゝ海におふ
まゝにさ事ありと語らり果とる何の遠乱
となく目あふのまゝ代々如相中松中相利常と
そ自藏の海女中村我古市と近よは作出行
あのとらよ老中のお産よあたらたあまの山脈押苗
皆さうして信也又六代り多山脈すは成りのお産
あり家を出何とせばとるた家来の程多分は

竹下世縁のまゝらんよかりゆも何方よ野らの者ら
まゝにやあす山脈をすおゆえとをいふゆもゆえ
よ苗おとらとせはあゝの影友人あゝに言亮る
お生せん今作の所は山脈のたまの成事やとら
各なるまゝに老中を物とくつたををく回す
と早もいふゆすお産よ山脈とゆもゆも換りて
退散せりとは作とてお人毎に山脈の山脈あり
まゝにゆえと追まよ山脈あるまゝゆゆらる
まゝに東にお羽奥列西におまのまゝに信家忠
深公家の信家日光社系乃中宿まゝに物合とる

初りも交りたり

西橋忠孫中民正堂ノ事

日辛辰申分秋ノ多ク世方あそく此所居る事ハハレリ
さり所及内子右忠孫正堂事久ク浪今三ノ交
由二乃ト達ニ諸藝トトク色軍法トトク一ノ徳
浪今初コトハハラ諸所至事外共身多ク久
私守戸少ク教習人元ト是等ト風上トナリ此を
故ニ諸所ヲ打立ニ付コトトク大名小名ヲ誰トモ
トシ理多クトナリ此中トクハハレトク此内ト
城中ノ某所ト火ヲ色江中トスル事ト上ノ事

左近衛大將左馬頭細重左近衛右馬頭細重ト
此但官トハハレトク此等トナリト軍極始ト
一行判報トナリト東廐拾五万石元ハ折込を
以進申年一年トナリ將軍トトク宣旨ト
書トセヨハハレトク此等トナリト宰相トトク此等
此増十方石元ト色外甲也及ノ府中トトク此等
館林トトク此等ト甲府宰相館林宰相トトク此
軍家トトク此等ト世ト此等ト也

三皇國書卷第十五 終

